連載企画「最前線の現場」の連載にあたって

小野寺 真一*¹

Introduction of research frontiers in hydrology

Shin-ichi ONODERA*¹

「最前線の現場」とは、まさに限られた専門家のみが知り得る最新の情報を、当事者の研究の新規性を損なわない範囲で速報的に発信していただくという、日本水文科学会の特徴の一つであるフットワークの軽さを最大限に活かした企画です。緊急度の高い現場、新規性の高い現場、災害が発生したばかりの現場などの現場発信型の企画から、最新の機器、試験地、研究室などの紹介、始まったばかりの研究プロジェクトの概要紹介などのまさに最先端紹介型まで、広く読者の皆様にとって興奮と緊張感を感じさせるものを提供していきたいと考えております。また、現場での計測にまつわる話題、とくに研究論文ではあまり触れられない計測上の失敗談を公表することで、他研究者が同様の失敗を繰り返さないように情報を共有することも念頭に置いております。

昨今、水文科学に関わる、または周辺の分野において様々な極端現象（津波災害、放射能汚染、火山噴火、豪雨災害、異常渇水等）が発生し、また関連して汚染や地盤沈下など様々な事象も発生しており、驚かされることが少なくありません。例えば、昨年（2014年）の8月20日未明に広島市北部で発生した集中豪雨は、極めて局地的でありながら大きな土砂災害を引き起こしました。また、今年（2015年）のゴールデンウィークに活発化した箱根大涌谷での火山活動は、周辺地域を立ち入り禁止にするなど温泉観光地に大きな影響

を及ぼしました。これらの情報の多くは、報道関係者による映像や文字の情報に限られ、必ずしも科学的な観察に基づくものは多いとはいえません。しかし、実際にその現場に立って観察している研究者、行政官、コンサルタントの方々がいるはずです。このような情報は研究論文等として公表されないこともあり、あるいは論文等になったとしても発行・出版までのプロセスを経るために緊急性や速報性は低くなっている場合も見受けられます。すなわち、学会誌といえども速報性や緊急性に軸足を置いた情報発信も重要だと考えます。他方、多くの研究現場では、常に最新の機器や手法を取り入れながら研究を推進しているはずです。これらも最前線（≡最先端）の現場といえるでしょうし、研究としての新規性に抵触しない可能な範囲で情報提供ができることは、多くの読者にとって有益であると考えられます。

本学会の会員数自体は少ないものの、掲載記事はJ-stageを通じて無料で世界に公表されており、読者の潜在数は他のオンラインジャーナルと差がありません。読者に魅力的であると同時に、科学的に価値の高い記事を増やしてゆけば、読者数は増えてゆくものと確信しております。企画原稿を広く公募いたします。皆様からの投稿を編集委員会一同お待ちしております。どうぞよろしくお願いいたします。

*1 広島大学大学院総合科学研究科 Graduate school of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University